令和二年度二年国語（古典）
臨時休校（5／12～5／31）宿題

二年　　組　　番氏名

教科書からの出題

評価…関心意欲・読むこと・書くこと・言語知識

平家物語（古典）

- **冒頭**
- **扇の的**
- **弓流し**

あっという間に四月が終わり、いよいよ五月ですね。四月の課題は自分で考えて取り組めましたか。人間が巣ごもりしている中、鶴見中学校の花は色鮮やかに咲き、鳥たちは元気に飛び回っています。早くみんなとまた一緒に勉強できる日を心待ちにしています。

＊前回の課題の模範解答をつけます。例はあくまで例です。想像して書くところはどのくらい想像を巡らせ考えを深め書いているかが評価対象です。書く問題は白紙で出さないようにしっかりと取り組みましょう。

＊五月までの家庭学習の問題から六月の記述テスト問題が作成される予定です。自分だけで勉強するのは大変なことですが、必ず自分の力になります。繰り返して自学自習の習慣をつけ、たくさんの情報を取捨選択し、考えを深めて成長していきましょうね。

平家物語（P132～145）プリント1日目

鶴見中学校二年　　組　　番（　　）

目標（付けたい力） 目標を達成するためのチェックリスト

- □ 平家物語について周辺知識を知ることができる。
- □ 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すことができる。
- □ 繰り返し朗読し、独特の調子や響きを楽しむことができる。
- □ 場面の状況や情景を読み取り、イメージすることができる
- □ 登場人物の心情を読み取ることができる。
- □ 登場人物の行動から、その人物像を捉えることができる。

ステップ1　平家物語について知ろう。（P132～145）

① 教科書の「冒頭」部分の説明や「作者」「出典」の説明を参考にして次の表を完成させよう。

作者名（よみがなも）	時代	ジャンル	語り部・内容（教科書より）
①（　　）が書いたと言われているがはっきりしない。	（②　　）時代初期に成立	軍記物語	語り部（③　　） 内容　約（④　　）年にわたる平家一門の興亡のありさまを語った（⑤　　）物語。主題は（⑥　　）」（永久にかわらないものはなく全てのものが変わりゆくこと。）を描いた文学。人の世のはかなさが登場人物の姿を通して語られます。 特徴　和文に（⑦　　）を交えた文章（和漢混交文）には独特の調子と七五調を基調としたリズムある文章で、琵琶法師の語る「平曲（平家琵琶）」として広く民衆に親しまれた。

歴史背景

保元の乱・平治の乱で勢力を広げた（⑧　　）は太政大臣となり天下の実験を握る。「平家にあらずんば人にあらず（平氏でなければ人ではない）」と言わしめるほど一門は栄華を誇る。しかし、平家のおごった態度に人々の反感は強まり、源氏の足音がしのび寄っていた。

一一八〇年　八月　源頼朝挙兵。
一一八三年　五月　**富士川の戦い**で平家軍は水鳥の飛び立つ音に驚き敗走。
　　一〇月　**倶利伽羅峠の戦い**。木曽義仲の夜襲。「火牛攻め」で平家敗走。この戦いで勢いに乗る木曽義仲は都に迫り、平家は都落ちしていく。
一一八四年　一月　**宇治川の戦い**。源氏の争いがおこり、源範頼、義経兄弟に木曽義仲が討たれる。都から平家を追放した義仲だったが、義経に敗れ最期をとげる。今度は義経が平家を追い詰めていく。
一一八五年　二月　**一の谷の戦い**。義経は平家を「鵯越の逆落とし」で奇襲をかけ、平敦盛が熊谷次郎直実に討たれる。総崩れとなった平家は会場に逃れた。
　　屋島の戦い。義経が背後から平家を奇襲。屋島でも勝利を収める。「**那須与一**」「**義経の弓流し**」の場面。
　　三月　**壇ノ浦の戦い**。平家は落ち延びた壇ノ浦で最後の戦いを挑むが敗れ、幼い安徳天皇と平家一門は海に入水（身を投げ）ついに滅亡。清盛が大乗大臣となってから十八年年後であった。海から引き揚げられた清盛の娘徳子（安徳天皇の母）は出家し、京都の大原でわが子と平家一門の供養の日々を送った。

平家物語プリント2日目　鶴見中学校二年　　組　　番（　　）

ステップ2（P132～145）

① 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改め右側に色ペンで書き、文章を音読し暗唱できるようにしよう。

② 下の語句の意味を読み、原文の左側に「口語訳」にあうように（　）に書き込み、訳を覚えよう。

祇園精舎の鐘の声

祇園精舎の鐘の（1　　）には、

諸行無常の響きあり。

諸行無常の響きがある。

沙羅双樹の花の色、

沙羅双樹の花の色は、

盛者必衰の理をあらはす。

（2　　）者の必ず滅びゆく（3道理　）を表している。

対句

おごれる人も久しからず、

権力におごる人も長くは続かず、

ただ春の夜の夢のごとし。

春の夜の夢の（4　　）。

たけき者もつひには滅びぬ、

武に強い人も、最後は（5　　）てしまう、

ひとへに風の前の塵に同じ。

ひとえに風に吹き飛ぶ塵と同じだ。

対句

語句の意味・解説

祇園精舎…お釈迦様のため建立した寺院

鐘の声…鐘の音

諸行無常…仏教的思想。この世のすべてのものは常に変化するものであり、永久に変わらないものはないという意味。

沙羅双樹…お釈迦様がいなくなったとき、その床の四方に二本ずつ植えられていたその気が互いに結ばれ一本になり、ことごとく白色に変じたという言い伝えがある。

盛者必衰…栄えるものの必ず滅びゆく

理…道理

おごれる人…（驕る）思いあがる。他人をあなどる人。見下し、高慢な態度をとる人。

久し…長い（時間が）

～からず…否定。～しない。

たけき者…勇ましく強そうな人。

つひに…（終に）。最後に。とうとう。

ほろび「ぬ」…助動詞・完了の意味

～た。～てしまう。

～してしまった。

※注意　咲かぬ（否定）

咲きぬ（完了）

ひとへに…（偏に）ただ。単純に。

塵（ちり）…土ぼこり。ごみ。紙くず。

平家物語プリント3日目　扇の的①鶴見中学校二年　　組　　番（　　）

（P132～145）

教科書の本文（右文）を読み、次の問いに答えよう。

治承四年（一一八〇）八月、源頼朝は伊豆で旗揚げをし、やがて鎌倉を本拠地に定めた。その年の九月には、同じ源氏一族である木曾義仲が信濃で兵を挙げた。義仲の軍は、北陸の戦いで平家を打ち破り、寿永二年（一一八三）七月、京へ攻め上る。平家の人々は、これを防ぎ切れず、都を捨て、西国へと落ちていった。翌年、ようやく勢力を盛り返して一の谷に陣を構えた平家だったが、頼朝の弟、義経の率いる平家追討軍の奇襲に遭って、たちまち敗走し、屋島に退いた。元暦二年（一一八五）二月、義経は、僅かな手勢と共に嵐をついて海を渡り、平家の背後から突如として屋島へ攻め寄せた。慌てた平家は舟を浮かべて海上に逃れ、陸の源氏と相対した。

日暮れを迎え、双方が陣をひきかけているところへ、沖の方から、小舟が一そう、みぎわへ向かってこぎ寄せてきた。「何だろう。」と見ていると、舟の中から、年若い女房が姿を見せ、扇を竿の先に付けて舟端に立て、陸に向かって手招きをした。この扇を射落としてみよ、とのことのようであった。義経は、下野国の住人、那須与一に命じて射させようとする。与一は、まだ二十歳前後の男であった。「てまえの力では及びませぬ。」と、一度は辞退する与一だったが、義経の命令は絶対であって、辞しがたく、「しからば、当たり外れはとにかく、仰せのとおりつかまつりましょう。」と、御前を退き、黒のたくましい馬に鞍を置いて、またがった。弓を取り直し、手綱をかい繰り、みぎわへ向かって馬を歩ませると、味方のつわものどもは、「かの若者ならば、確かに射当てるに相違ない。」と、その後ろ姿をはるかに見送ったが、それは、義経も同じ思いだった。矢ごろが少し遠かったので、海へ六間ばかり馬を乗り入れたが、それでもまだ、扇との間は四十間余りはあると見えた。

1 指名された与一が「扇の的」に向かう場面での、次の人物の言葉を抜き出し、波線を引こう。

ア　義経に指名されたときの与一

イ　辞退できないと感じたときの与一

ウ　与一を見送る義経や源氏の武士たち

2　次の歴史的仮名遣いを含む部分を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書き表そう。

①二月（にんぐわつ）（　　）　②揺りすゑ漂へば（　　）　③大明神（だいみやうじん）（　　）　③へん（　　）

⑤はづさせたまふな（　　）　⑥取ってつがひ（　　）　⑦よつぴいてひやうど（　　）

⑧小兵（こひやう）といふぢやう（　　）　⑨ひいふつとぞ射切つたる（　　）　⑩さつとぞ散つたりける（　　）

⑪みな紅（ぐれなゐ）（　　）　⑫黒革をどしの鎧（よろひ）（　　）　⑬御定（ごぢやう）（　　）

⑭しや頸（くび）の骨をひやうふつと（　　）　⑮九郎義経（くらうよしつね）（　　）　⑯嘲哢（てうろう）（　　）

平家物語プリント4日目鶴見中学校二年　　組　　番（　　）

（P132～145）

★教科書をみながら歴史的仮名遣いに注意して①～⑭を現代語訳してみよう。

①ころは②二月十八日の③酉の刻ばかりのことなるに、④をりふし北風激しくて、⑤磯打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ揺りすゑ漂へば、扇もくしに⑥定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏、⑦くつばみを並べてこれを見る。⑧いづれもいづれも⑨晴れならずといふことぞなき。与一目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り⑩自害して、⑪人に二度面を向かふべからず。いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせたまふな。」

と心のうちに⑫祈念して、目を見開いたれば、風も少し⑬吹き弱り、扇も⑭射よげにぞなつたりける。

現代語訳

①（　　）は二月（②太陽暦の　　月）十八日、③（午後　　時頃）のことであったが、④（　　）北風が激しく吹いて、⑤（　　）も高かった。

舟は、揺り上げられ揺り落とされ上下に漂っているので、竿頭の扇もそれにつれて⑥（　　）。沖には平家が、海上一面に舟を並べて見物している。陸では源氏が、⑦（　　）これを見守っている。⑧（　　）も、⑨（　　）情景である。

与一は目を閉じて、

「南無八幡大菩薩、我が故郷の神々の、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、願わくは、あの扇の真ん中を射させたまえ。これを射損じれば、弓を折り、⑩（　　）、⑪（　　）。

いま一度本国へ帰そうとおぼしめされるならば、この矢を外させたもうな。」

と⑫（　　）、目をかっと開いて見ると、うれしや風も少し⑬（　　）、的の扇も静まって⑭（　　）。

平家物語プリント5日目　扇の的②

（P132～145）

鶴見中学校二年　　組　　番（　　）

与一、①かぶらを取ってつがひ、②よつぴいて③ひやうど放つ。小兵と④いふぢやう、十二束三伏、弓は強し、浦響くほど⑤長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、⑥ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは⑦虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさっとぞ⑧散つたりける。夕日のかかやいたるに、⑨みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、⑩浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて⑪感じたり、陸には源氏、えびらをたたいて⑫どよめきけり。

与一は、①（　　）を取ってつがえ、②（　　）③（　　）と放った。小兵とは④（　　）、矢は十二束三伏で、弓は強い、かぶら矢は、浦一帯に鳴り響くほど⑤（　　）、あやまたず扇の要から一寸ほど離れた所を⑥（　　）と射切った。かぶら矢は飛んで海へ落ち、扇は空へと舞い上がった。しばしの　⑦（　　）に舞っていたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさっと⑧（　　）夕日に輝く、⑨（　　）、⑨（　　）揺れているのを、沖では平家が、舟端をたたいて⑪（　　）、陸では源氏が、えびらをたたいてはやし立てた。

平家物語プリント6日目　扇の的③

（P132～145）

鶴見中学校二年　　組　　番（　　）

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、舟のうちより、①**年五十ばかりなる男**の、黒革をどしの鎧着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて②**舞ひしめたり**。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、

「御定ぞ、つかまつれ。」

と言ひければ、今度は中差取つて④**うちくはせ**、⑤**よつぴいて**、しや頸の骨を⑥**ひやうふ**つと射て、舟底へ逆さまに射倒す。平家の方には⑦**音もせず**、源氏の方にはまたえびらをたたいて⑧**どよめきけり**。

「あ、射たり。」

と言ふ人もあり、また、

⑨**「情けなし。」**

と言ふ者もあり。

あまりのおもしろさに、感に堪えなかったのであろう、舟の中から、年の頃①（　　）、黒革おどしの鎧を着て、白柄の長刀を持った男が、扇の立ててあった所に立って②（　　）。そのとき、伊勢三郎義盛が、那須与一の後ろへ馬を歩ませてきて、

「御定であるぞ、射よ。」

と命じたので、今度は中差を取ってしっかりと④（　　）、⑤（　　）、男の頸の骨を⑥（　　）と射て、舟底へ真っ逆さまに射倒した。平家方は⑦（　　）、源氏方は今度もえびらをたたいて⑧（　　）。

「ああ、よく射た。」

と言う人もあり、また、

⑨「（　　）」

と言う者もあった。

平家物語プリント7日目　弓流し①

（P132～145）

鶴見中学校二年　　組　　番（　　）

弓流し

源氏の行為を残念に思ったのだろうか、みぎわに二百人余りの平家が攻めてきたが、逆に八十余騎の源氏に攻め立てられ、舟に逃げ帰ってしまう。勝ちに乗じた源氏は、馬の太腹が漬かるほど海に乗り入れて戦った。そのとき、義経の弓がはずみで平家に引っ掛けられ落とされてしまう。義経は、味方の制止も聞かず、むちでかき寄せて取ろうとし、やっと拾い上げて帰った。老臣たちが、「どんなに高価な弓であろうとも、どうしてお命に替えられましょうか。」と非難すると、義経はその理由を答えた。

「①**弓の惜しさに取らばこそ**。義経が弓といはば、②**二人しても張り、もしは三人しても**張り、叔父の為朝が弓のやうならば、わざとも落として③**取らすべし**。④**厖弱**（おうじゃく）たる弓を敵の取り持つて、『これこそ源氏の大将九郎義経が弓よ。』とて、⑤**嘲哢せんずる**が⑥**口惜しければ**、命にかへて取るぞかし。」

と、⑦**宣**（のたま）**へば**、⑧みな人これを⑨**感じける**。

「①（　　）。義経の弓が、②（　　）で張る叔父の為朝の弓のようなら、わざと落としてでも③（　　）。④（　　）弓を敵が拾い、『なんとこれが源氏の大将九郎義経の弓だよ。』と⑤（　　）⑥（　　）、命懸けで拾ったのだよ。」

と⑦（　　）、⑧（　　）がこれを聞き⑨（　　）。

平家物語プリント8日目　鶴見中学校二年　　組　　番（　　）

（P132～145）

★那須与一が扇の的を射落とした場面の情景描写を読み取ろう。

2　与一が扇を射る直前の風と扇の様子を、現代語訳を参考にして書こう。

①源氏の大将		
②那須与一の年齢		
③与一が海に入った距離	＝　約　　メートル	
④与一から扇までの距離	＝　約　　メートル	
⑤日付		
⑥時刻		
⑦風や海の様子		
⑧舟の様子		
⑨扇の様子		
⑩海の平家の様子		
⑪陸の源氏の様子		

4　神々に祈念している与一が命懸けだとわかる部分を原文から一文で抜き出しそう。

（　　）

5　与一が射落とす前の様子を見ていた平家と源氏の行動を原文から抜き出し、色分けしてみよう。

6　与一が射落とした後の様子を見ていた平家と源氏の行動を原文から抜き出し、色分けしてみよう。

7　この場面136ページ上段1～12行目で、イメージできる色を「〇〇の赤」というように四つ書こう。

・（　　）の（　　）　・（　　）の（　　）

・（　　）の（　　）　・（　　）の（　　）

8　臨場感をだす表現の工夫として、擬音語や対句的表現が使われている。古文に赤ペンで波線を引いてみよう。また、対句的表現だと思うところを囲み、↔線でつなげよう。

9　戦いの最中に舞を舞う男や、命懸けで弓を拾い上げた義経の姿から、「平家物語」に描かれた武士の価値観や人物はどのような考え方をしていたか想像してまとめてみよう。

平家物語プリント9日目　鶴見中学校二年　　組　　番（　　）
（P132～145）

10　与一が二射目に「男」を射たとき、A「あ、射たり」、B「情けなし」の二通りの反応がありました。あなたはどちらの立場をとるか、なぜそう考えるか。次の条件に従って自分の考えを書かこう。
①こちらの立場をとるか書くこと。　②学習したことや、本文中の内容を踏まえて理由を書くこと。

11　②句や表現に気を配ること（句読点は一文字）。　④段落は作らず、８０字以上１００字以内で書くこと。
平家物語からあなたはどのようなものの見方や考え方を読み取りましたか。あとの条件に従ってあなたの考えを書きなさい。

①段構成とすること一段落目には印象に残った場面（誰がどうしたこと）とその理由を述べること。２段落目にはその行動についてあなたの考えを述べること。
②原稿用紙の使い方に従って八十字以上、百字以内で書くこと。

私は、「　　」の立場です。

〈振り返り〉
①歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すことができたか。（５・４・３・２・１）
②繰り返し朗読し、独特の調子や響きを楽しむことができたか。（５・４・３・２・１）
③場面の状況や情景を読み取り、イメージすることができたか。（５・４・３・２・１）
④登場人物の心情を読み取ることができたか。（５・４・３・２・１）
⑤登場人物の行動から、その人物像を捉えることができたか。（５・４・３・２・１）